

町史

とっておきの話

175

栃木県立博物館名誉学芸員

柏村 祐 司

今月号から栃木県立博物館名誉学芸員の柏村祐司先生が只見町の民俗を6回に分けて連載します。柏村先生は、栃木県立博物館学芸部長を最後に退職されましたが、只見町の民俗調査は20年以上も続けられており、これまでに同博物館の特別展で只見の狩猟や民具、つる細工などをいろいろな形で紹介されてきました。今回はそのエッセンスを連載していただきます。



狩猟姿をした故 皆川喜助さん

山間地の人々の暮らしに興味と関心を持つ私は、南会津、中でも只見町の人々の暮らしに魅了されました。只見町には自然を上手に利用してきた人々の生活の知恵がたくさん息づいており、また、自分たちの生まれた故郷をこよなく愛し、先人の生き様をしっかりとの後の人々に伝えようとする息吹が感じられたからです。今回から6回に分けて、これまでに伺ったお話を記すことによって、調査でお世話になった方々へのせめてもの恩返しといたします。

只見町には栃木県の日光地方にはない独特な狩猟習俗があり、

その一部は今なお狩人の間で傳承されています。その一つが秋田の阿仁のマタギの影響を受けた狩猟習俗です。阿仁のマタギの活動範囲は広く、江戸時代には東北一円にまで及び遠く只見までやってきました。そうした阿仁マタギの来訪を伝える話として「塩ノ岐の目黒俊衛家の先祖は秋田の猟師であった」、黒谷入の倉谷は、狩猟の盛んな集落であったが「熊捕りは秋田が元だ」、「黒谷川の上流には『秋田衆小屋場』と呼ぶ場所がある」などといった話はよく知られたものです。

秋田マタギがもたらした物として、マタギ文書があります。旧田子倉の皆川政一郎氏所蔵の「山立根元巻」がそれですが、中身は赤城の神と争っていた日光の神をマタギの先祖である万三郎が助け、勲功により日本国中の山々での狩りを許されたことと穢れはらいの修法とを記したものです。マタギ文書は、もと

もマタギが余所の土地で狩をする際に、狩の権利を主張するために作成した偽の文書です。諸国を渡り歩いた阿仁マタギならではの知恵から創作された物です。皆川氏所蔵の「山立根元巻」は、マタギが所持していた物を手本に多少書き加えたものと思われます。

阿仁マタギがもたらしたものとしてはその他に、狩場を神聖な所として里と区別する風習や指揮者を中心とした組織的な狩猟方法などがあります。狩場を神聖な所とする風習では、狩に行く際に山の入口にある山ノ神で祭りを執り行い、そこから上では里の言葉を使わずに山言葉を使うといったことが見られます。山言葉は一種の隠語で、例えば熊をコシマキ、太陽をオオデラシ、月・星をコデラシ、血をネイガネ、米をタグサなどといいます。もし、誤って里言葉を口にすると、親方から真冬でも「精進潔斎が足りないからだ、水を

浴びてこい」と怒られたそうです。指揮者を中心とした組織的な狩猟方法は、カモシカ狩と熊狩とで行われました。カモシカ狩をシシヤマ、熊狩をクマヤマといい、ともに一般に言う巻狩の方法によるものです。狩は沢単位に行い、見通しの良い所に指揮者が位置し、それ以外は獲物を追う役と獲物を射止める役とにわかれます。指揮者を山言葉でメアテ、獲物を追う役をナリコ、射止める役の中でも中央に位置する者をシンのマチメ、その両側に位置する者をイデシのカタ、カッテのカタとそれぞれ言います。

こうした狩の話は、主に旧田子倉出身の故皆川喜助さんより聞き取ったものです。大正3年生まれ喜助さんは、旧田子倉での昔ながらの狩猟を経験した最後の人で、山言葉やクマヤマのことだけでなく、田子倉での暮らしを実によく記憶されていた最高の話者でした。改めて感謝申し上げる次第です。